

ている。計測を繰り返し、自分の畑でできた作物について農家自身がデータを持ち、数値を表示した上で流通・販売することは、消費者に安心して購入してもらうために必要な措置だ。これを宮城県農家全員の気持ちとして共有したい。

作付け前の今のうちにやらなければいけないことはたくさんある。田んぼが復旧して、国の支援をいただいたとしても、安心安全で宮城の食文化を担えるおいしい生産物が作れない土であれば、それは悲しいことだ。

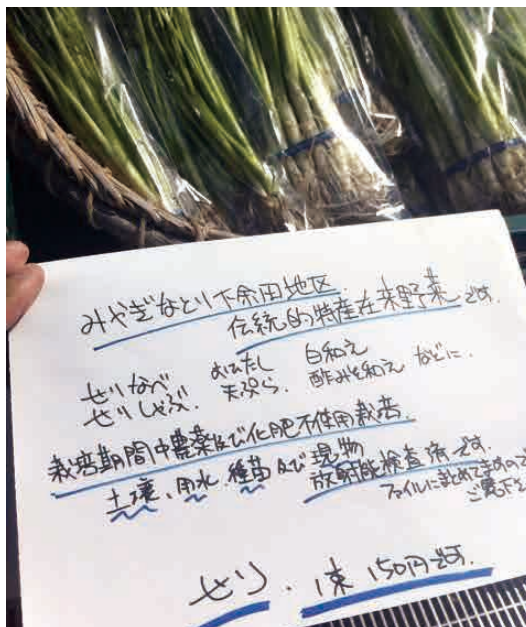
震災からこれまで想像力をたくましくさせて、ここで農家をしながら10年・20年子どもを養いながら生活し続けていくためにはどうしたらいいか、新たな情報を仕入れながらずっとシミュレーションをしている。

震災を振り返って

たくさんの方がすでに仰っているが、目をつぶって見ないでおいできたものが一気に出てきた。自分の力で、あるいは自分の連携でできる相手づくりの中で対応して、ひとつひとつ解決していかなければいけない、という覚悟がついた気がする。漫然と取り組んではいけない現実もある。現状としてはまったく対応は追いついていないし、認めたくない気持ちもある。大地と共につながる最前

線の農家として考えると、この大地を一番最初に諦めなければいけない、そういう判断をしなければいけないのが一次産業の人間だ。

田畑への執着があるし、安心安全な食べ物を生産することで、食べる人の健康づくりと笑顔に寄り添いたい。そのためにあらゆる試行錯誤を重ね、さまざまな方々と思いを共有していきたいと思っている。



個人

大震災を経て学んだのは、感謝の心。たくさんの方がつながって、私たちの暮らしが成り立っている。

仙台市

長田 賢一 武心學館 長田道場 師範

取材日 2012.2.23

個人

1980年代から90年代にかけて(社)全日本空道連盟 大道塾が主催する北斗旗全日本空道選手権大会を幾度も制し、現在は大道塾仙台西支部の支部長を務める。独自道場を開いてからの10年で、延べ800人の門下生を指導してきた。道場生の情操教育や道徳教育の一環として環境活動に取り組み、仙台七夕祭りのごみ分別活動に参加するなど地域環境活動に力を入れている。

3月11日 14時46分

たまたま両親が来ていて、帰ろうと外に出た時に地震が来た。とっさに母を抱え込んだが、ものすごい揺れであったのでこれは建物が倒れると思った。母はだいぶ怖がっていたので、一緒にいることができ幸いだったと思う。実家は岩沼にあり、もし別々にいたら連絡もとれず安否がわからないまま過ごすことになっただろう。

揺れがおさまると、ケガもなく一緒にいた安心感もあり、両親は「宮城県沖地震終わったね、あと

20年はこないな」と呑気なことを言いながら岩沼へと帰って行った。

道場の事務所の中は全てのもが落ちてごちゃごちゃになっていた。家の中も同様で、住めない状態だった。夕方に講演の予定が入っていたが、停電になっていたのでこれは中止だろうと判断し、1人黙々と片づけをしていた。夜になって郡山にいる妹夫婦と連絡がとれた。私としてはここがすごく揺れたと思っていたので、両親に怖い思いをさせてしまった、仙台で一番揺れたんじゃないかと話したら、「何言ってるの、大変なことになっ

ているんだよ！」と返された。何が大変なのかと聞いても「とにかくすごいんだから！」と要領を得ない。すぐに車載テレビでニュースを見て、はじめて未曾有の大震災が起きたことを知った。特に信仰はないが山伏の修行をしたいと思い、夏や秋に山形の羽黒山に1週間程籠る。普段も毎朝、道場の神棚に祝詞をあげている。道場生にはよくなってもらいたいし、この国もよくなってもらいたいし、自分もその役に立ちたいと思っている。そんな生活をしていると、今の環境や日本人の在り方がこのままでいいのかとってしまう。津波の映像を見た時は、くる時が来たのかと、そう思った。

ライフラインが止まった中で

ガソリンは満タンであったし、灯油の買い置きもあった。水は2日ほどは出たので容器にためておいた。電気はすぐに復旧するだろうから、何とかかならうと腹をくくっていた。普段から玄米と漬物と味噌汁という食生活をしており、山伏の生活ではほとんど飲まず食わずで10日間を過ごすため、食べ物に関してもさほどに大変であると感じなかった。逆に皆からもらって普段より栄養のある食生活になった。

ただ、知れば知るほど深刻な事態であることを実感した。電気やガスがない生活でも個人的には困らなかったが、現代の生活のツケがきたのかとも感じた。これまで当たり前に使っていたが、いろんな人がつながって暮らしていることに改めて思い至った。

現代は「感謝」する気持ちがなくなってきた。震災後2・3日目から、武道という伝統的なものに関わる身として、伝統が果たす役割を再認識してしっかりと取り組んでいかなければと思うようになった。真剣勝負の武道の世界では、感謝することや謙虚になることについて考えさせられることが多い。物事にはきちんと感謝をしたいし、謙虚に生きたい気持ちを持っている。たとえば、ご飯を食べる時に「いただきます」と言うのはもちろん、感謝をしていただくようにしている。太陽の恵みや水があり風があり、農家の方が耕して、稲が成長して行って、誰かが買ってスーパーに並び自分が買い、自分で作って食べる——までを、たまには想像しながらいただく。

ありがたいと感謝することは必要だと思う。いろいろな人がつながって、生活ができています。もう一度皆で感謝する気持ちを持ってもらいたいと感じた。



震災後

友人などから物資が届いたので、知り合いに連絡をとり山元町や北上へ届けに行った。

岩沼や山元町の避難所で物資の積み入れをしていたが、沿岸部には行かなかった。雄勝町や女川に行った時は、すべてがなくなることであるんだと嘔然とした。人格も人の思いも、今までの人生も、地域の歴史も含めてすべてなくなった。すべてが終わったような錯覚に陥り、虚無感とともにため息しか出なかった。

物資を届けに行っても、被災者の顔は疲れきっていて悲惨であった。

安否確認を行い、道場は3月末から稽古を再開した。他の武道館や市民センターは稽古ができない状況だったが、休みたくはなかったので車で送迎を行い、青空道場も行った。

道場生育成のための環境教育

環境の取り組みは、子どもたちの情操教育や道徳的教育として始めた。ごみが落ちていたらダメだと思し、拾わなくちゃと思ひ、捨ててはいけないと思ひのは、心の問題だからだ。武道は単に勝ち負けだけではない。何のために強くなるのかと考えた時、人の役に立つことを考えてほしい。そこで、人の役に立つことを体験させようと、ゴミ拾いや七夕のごみ分別の手伝いをさせてもらった。環境のことはそこで学ばせてもらった。物を無駄にしないために七夕の竹を炭にする活動や、水源の保護活動にも参加することで、自分達の生活を守るとはどういうことなのかを学んだ。自分達の分を知り、何を大事にして守っていかなければいけないかを考える上で、環境は生活そのものなので最良の題材だ。

一方で、木を植えよう、ごみを拾おう、リサイクルしようといろいろなことに取り組んだが、これまで「感謝」という単語は出てこなかった。大震

災を経て、さまざまな繋がりに「感謝」する事こそ大事だと思うようになった。

建物をはじめ作ったものは壊れる。後世につなげられるものは気持であり、伝統や文化、日本人としての伝統的な意識を伝えることだと思う。それは命を伝えることでもある。震災後は、先祖や自然や、人と人とのつながりに感謝して生きてきた人達のおかげで、今の自分があるということを明確に自覚できた。先人達はもちろん親や先生にも感謝することは、地に足付いて物事に取り組む時に大事なことだと思う。武道は特にメンタリティーが大切であるし、前に進むということは、自分自身の深みを知ることもである。物事に感謝するスタンスがあってはじめて物を大事にする思いが生まれ、その心は環境を守る活動にもつながっていく。

振り返って思うこと

本来感謝すべきものに感謝しなかった、見るべきものを見てこなかった。気がつく機会はこれまでに何回もあったのに、気がつかなかった人の愚かさ目目の前の欲に気を取られる欲深さは常に反省しなければいけない。よっぽどの機会がなければこうしたことを振り返れない人の愚かさを自分に

感じた。油断や奢りは自身でなかなか律することはできないが、律するために真摯に取り組んできた方々が先輩にいて、命が紡がれてきたのだと感じる。武道の世界でも先輩方、先人達が教えを守ってきたから、この伝統的な文化が伝えられてきた。その恩恵にあずかっている我々が、学びとして活かしていない部分が多い。それは明らかに奢りであり油断であり横柄さであり、これらをいかに律するかを日々生活の中で反省し、日々感謝する心を持ちたいと思っている。



撮影：2011.7.15 山元町

大学

仙台市

1人ひとりの死が1万数千件あった災害。 失われたのは普通の地域の普通の人々の営み。

新妻 弘明 東北大学大学院環境研究科 教授

取材日 2012.3.12

日本地熱学会会長、国際地熱協会理事等を歴任。2002年からエネルギーの地産地消である概念「EIMY (Energy In My Yard)」を提唱し、岩手・宮城・福島・長野等で実現に向けた実践研究に取り組んでいる。震災後に発刊した著書「地産地消のエネルギー」では、実践例を交えながら自然エネルギーを地域レベルで活用していく方法を説いている。

大学

3月11日 14時46分

研究室にいた時、スピーカーから緊急地震速報が流れてきた。宮城県沖地震を経験していたが、それより長く大きな地震だと感じた。自分のデスクの下に身を隠しながら3度の大きな揺れを感じた。いつもなら揺れが落ち着く頃に長い揺れが何回か発生し、2回目、3回目の揺れで次々と大きな本棚は倒れた。振幅が1mほどあったように思う。「確率99%で起こるといわれていた宮城県沖地震は終わったな」とほっとした思いがした。その時点で津波の知らせはもちろん知らなかった。その後、避難場所となっているテニスコートへ避

